『日本古代史書研究』目次

序章　古代史書と現代国家……1
はじめに……1
第一節　現代社会における史書と国家……2
1　国際政治における現代国家史……2
2　日本における移民問題とアイデンティティ……4
3　現代国家における史書研究の意味……5
第二節　本書の構成……7
1　本書の概略……7　2　六国史以前の史書……7
3　国史の編纂作業と実録……9　4　六国史の研究……10
5　本書のまとめと課題……12
おわりに……13
典拠史料一覧……17

第一部　六国史以前の史書……21
第一章　天皇記・国記考……23
はじめに……23
第一節　関連史料の基礎的検討……24
1　諸史料の予備的考察……24
2　推古紀と皇極紀の評価……26
第二節　『日本書紀』皇極四年六月己酉条の分析……28
1　天皇記・国記の焼失と船史恵尺……28
2　国記「奉献」と『姓氏録』序……30
第三節　『日本書紀』推古二十八年是歳条の分析……32
1　書名「天皇記」と国記の理解……32
2　「臣連…本記」の検討……34
3　「国記」の内容……37
おわりに……40

第二章　王統譜としての天皇記……47
はじめに……47
第一節　先行研究と論点の整理……48
第二節　天皇記関連史料の考察……50
1　天皇記の直接的な史料……50　2「帝紀」の本文史料……51
3「帝紀」の書名史料……54
第三節　天皇記の内容……57
1　神話・系譜と年紀……57　2　文体と用字……59
おわりに……61
第三章　氏族系譜としての国記……67
はじめに……67
第一節　推古二十八年の「皇太子嶋大臣共議之」……68
1「皇太子」「嶋大臣」の史料……68　2　その解釈と分析……70
第二節　「臣連伴造国造百八十部并公民等本記」一書説の検討……72
第三節　「史書」史の再考と推古朝の氏族制……74
1「史書」史のなかの国記……74　2「国記」関連史料の検討……74

第四節　国記の「戸籍」的機能……76
1　船史恵尺と発現期の戸籍……76
2　「国記」の由来……78
おわりに……79
〔コラム〕帝紀・旧辞の成立……88
第四章　上宮記考……93
はじめに……93
第一節　『上宮記』関連史料の考察（1）……94
1　『釈日本紀』所引『上宮記』一云……94
2　『聖徳太子平氏伝雑勘文』所引『上宮記』下巻「注云」……97
第二節　『上宮記』関連史料の考察（2）……99
1　『日本書紀私記』丁本にみえる『上宮記』……99
2　『天寿国曼荼羅繡帳縁起勘点文』所引「或書」と『三宝絵』巻中・第一条……102
第三節　『上宮記』と天皇記・日本書紀……105
1　『上宮記』と天皇記……105
2　舒明朝の政治過程と天皇記・『上宮記』……109
おわりに……112

第五章　古事記再考 ―その史料批判と「史書」史の位置づけ―……121
はじめに……121
第一節　古事記の系譜記事……122
1　帝紀としての古事記……122　2　一祖多氏型系譜（建内宿禰系譜）の分析……124
3　母系系譜の分析……126
第二節　序文と本文の検討……129
1　序文による作業工程……129　2　本文の成立時期……132
第三節　古事記と日本書紀……136
1「記紀」の両立性……136　2　成立過程の比較検討……139
第四節　「古事記」の多様性……141
1　講書における古事記……141　2　複数の「古事記」……144
3　〝古事記〟というカテゴリー……147
第五節　偽作された史書と系譜……148
1　古代の偽作……149　2　反動としての九世紀……151
第六節　古事記の成立……154
1　講書における「史書」の価値化……154　2　古事記「序文」の偽作……157
3　古事記本文の由来……159

おわりに……162

付章1　日本と朝鮮の古代史書……175

はじめに……175

第一節　書評　遠藤慶太『東アジアの日本書紀』……176

第二節　日本と朝鮮の古代史書……180

1　百済史書の成立……180　2　朝鮮の古代史書……181

3　天皇記・国記と対外契機論……185

おわりに……188

第二部　国史の編纂作業と実録……193
第六章　国史の編纂と実録……195
はじめに……195
第一節　先行研究の整理と問題の所在……196
1　先行研究の整理……196　2　実録肯定説の検討……198
3　実録否定説の検討……201
第二節　関連史料の解釈……202
1「修撰国史」の検討……202　2「監修国史」および考課令の検討……204
3『続日本紀』奏上の上表文の検討……206
第三節「田村記」と図書寮の人員配置……208
1「田村記」の検討……208　2　図書寮の人員配置……210
おわりに……212
第七章　国史編纂の資料と作業……219
はじめに……219

第一節　編纂資料……220
1　外記日記・内記日記と公文書……220　2　氏族系譜と日記その他……223
第二節　資料の集積と保管……225
1　資料の集積……225　2　資料の保管……227
第三節　編纂作業……228
1　実録の編纂……228　2　国史の編纂作業……231
おわりに……234
付章2　実録編纂に関する補説……239
はじめに……239
第一節　細井浩志氏著『古代の天文異変と史書』の内容……240
第二節　細井書の批評と実録の編纂……243
1　細井書の批評……243　2　実録の編纂について……245
おわりに……246
〔コラム〕武家の歴史書……250

第三部　六国史の研究……255
第八章　戦後六国史研究の潮流……257
はじめに……257
第一節　戦後の六国史研究……258
1　一九四〇～一九六〇年代……258
2　一九七〇年代……259
3　一九八〇年代……260
4　一九九〇年代……261
5　二〇〇〇年代……262
第二節　研究の諸段階と今後の展望……264
1　研究の諸段階と問題点……264
2　今後の展望……265
おわりに……267
第九章　成立前後の日本書紀……273
はじめに……273
第一節　神代巻の構造と「一書」……274
1　「一書」の諸相と分析の視角……274
2　神世七代章における本文と「一書」……276

3　日本書紀の編纂と「一書」……279
第二節　書紀所引の諸本と異本……282
1　「或本」「一本」「別本」「旧本」の考察……282　2　雄略紀「別巻」の考察……284
3　「日本書紀」の異本の成立……286
おわりに……288
第十章　続日本紀の歴史認識 ―長屋王の「誣告」記事をめぐって―……295
はじめに……295
第一節　光仁朝における挿入の検討……296
1　続日本紀の編纂段階と「誣告」記事……297　2　中西康裕説の検討……298
第二節　淳仁朝・桓武朝における挿入の検討……301
1　淳仁朝・桓武朝の政治的概況と記事の挿入……301　2　長屋王の「怨霊」……302
3　中川收説の検討……304
第三節　桓武朝の歴史認識と長屋王の評価……306
1　桓武朝の政治情況……306　2　早良親王の死因……308
3　長屋王という存在……310　4　桓武「新王朝」の演出……311
おわりに……313

第十一章　日本後紀の可能性……319
はじめに……319
第一節　大平和典氏著『日本後紀の研究』の内容……320
第二節　日本後紀の可能性……323
おわりに……326
第十二章　日本三代実録の別称「外記番記」……331
はじめに……331
第一節　「外記番記」を日本三代実録の別称とする諸説……331
第二節　史料『惟賢比丘筆記』……333
第三節　『惟賢比丘筆記』の「六国史」……336
第四節　「外記番記」について……340
おわりに……342
〔コラム〕近現代における天皇実録……345

第十三章　「記紀」以外の古代史書
―『大倭本紀』と『仮名日本紀』を中心に―……349
はじめに……349
第一節　平安期の古事記と「記紀」以前の史書……350
1　平安期における古事記の評価……350　2　「古語仮名之書」「古語之書」「古書」……352
第二節　『大倭本紀』の考察……355
1　『大倭本紀』の内容……355　2　資料系統および「記紀」との関係……357
第三節　『仮名日本紀』の考察……360
1　『仮名日本紀』の内容……360　2　記述範囲と類書の存在……362
3　『仮名日本紀』と養老講書……364
おわりに……367

終章　古代国家の形成と史書……377
はじめに……377
第一節　王権の形成と稲荷山古墳出土鉄剣銘・帝紀……378
1　日本最古の「史書」……378　2　帝紀の成立……379

第二節　氏族制国家の到達点と天皇記・国記……381
1　天皇記……381　2　国　記……382
第三節　律令制国家の成立と日本書紀・古事記……383
1「史書」史の〝大化改新〟……383　2　日本書紀の成立……384
3　古事記の位置……386
おわりに……387
あとがき……393
索　引……1
書名・史料名……1　研究者名……7

序章　古代史書と現代国家

はじめに

本書は日本古代の史書、すなわち帝紀・旧辞、天皇記・国記、『上宮記』や『古事記』、六国史を考察している。その内容や編纂の方法・資料を中心に、それを完成させる時代ごとの政治権力や国家のあり方に注意を払いつつ、日本古代の「史書」史を描こうとしたものである。

本書を始めるにあたって、それが現代の社会に対してどのような意味をもつのかを説明したのが本章の第一節「現代社会における史書と国家」である。研究は社会課題と関連づけてはじめて学問になる。古代史であってもそれは同じであり、むしろ現代から隔たりのある時代だからこそ、その関係性を意識し、これを研究者自身が提示することは重要になってくる。青臭い問題意識ではあるが、そう長くはないので筆者の意図する本書刊行の意味として流し読みしていただければありがたい。

第二節「本書の構成」は右の考えにもとづいて取り組んだ個々の史書研究の概略である。各論としての考証と結論はそれぞれの章に委ねるが、研究史としても読書史としても権威化された「記紀」を相対化し、史書がその時々

の政治過程や国家理念を反映していることを明らかにしようとした点は一貫している。史書の編纂とは過去の事実を記録することではなく、その時代の政治権力とイデオロギーの表現である。その意味でそれぞれの史書に対する史料批判と政治史の分析は不可欠であり、本書自体もそのような現代社会の課題のなかで位置づけられる。

第一節　現代社会における史書と国家

1　国際政治における現代国家史

一九九〇年代、東西冷戦構造の崩壊はアメリカの帝国主義を助長し、その後の中東情勢の複雑化とこれに起因するテロの時代をもたらす背景となった。その直接の要因が二十一世紀の初年、二〇〇一年九月十一日に起こったアメリカ同時多発テロであった。二〇二二年の現在にいたる国際政治の基本的な潮流はその現場であるニューヨークのグランド・ゼロ（旧・世界貿易センタービル）に端を発している。戦後の国際政治においてある意味で安定したレジームを提供していた米ソ対立が消滅した結果、アメリカという一極とこれに対抗する多極というあらたな政治構造が生まれた。フランシス・フクヤマはこれを「歴史の終わり」と称したが、[1]それは現代史の区分として正しい表現であったろう。現在は中華人民共和国という新たな対立軸が生じており、ロシア（旧ソ連）も勢力を盛り返しているが、アメリカが国際政治の中心という状況に変化はない。

いっぽう、ヨーロッパでは二〇〇〇年代前後からアフリカ、中東からの移民が増加した。ロシアやアメリカが同地に政治介入した結果として多くの難民を生み出したためである。これを受け入れるヨーロッパ諸国は、過去の歴史への反省とともに血統を尊重するドイツ、自国の生活様式や文化を強要するフランス、相手文化の承認と不干渉

を決めたオランダなど対応はさまざまであるが、現時点でその「共生」はどれも成功していない。[2] 移民問題については多文化主義にもとづいた市民統合という玉虫色のゴールを設定するのが標準的な解決策となっているが、[3] その実現はけっして容易ではない。

その移民で成り立っている最大・最強の国家であるアメリカ合衆国[4]の政策は自国ファーストのトランプ政権（二〇一六～二〇二一）の政策のもとでこれを否認する方向に傾斜した。メキシコからの移民とこれを排除する国境の「壁」の建設は、自国にとって不都合な他民族の流入を抑止しようとする現代アメリカを象徴する政策であった。しかし、彼らは労働力だけ搾取される存在であることに納得しているわけではなく、自らの意志をもってアメリカ社会に存在している。[5] 資本主義経済の急激な進展とこれによって錯綜する移民の問題はアメリカ一国に限定されず、今もっとも切実なグローバル・イシューとなっている。バイデン大統領はこの難局に宥和的な姿勢で対応すると予想されるが、それだけで問題が解決されるわけではない。

そのような現代の国際政治の基調が形成された二〇〇〇年代、揺れ動く日本国家の舵をとったのは小泉純一郎首相（一九四二～）だった。二〇〇一年四月二十六日から二〇〇六年九月二十六日まで五年半つづいた第一～三次内閣では新自由主義経済・市場原理主義を意識的、結果的に促進するさまざまな政策が実施された。自己責任論という言説を一般化した小泉首相の言動は、そのような思潮を本流とするのに十分であった。しかし、私たちはこれを国家行政や首相のパーソナリティの問題に矮小化してはならない。

小泉内閣の政策を象徴する郵政民営化は、衆議院議員総選挙と直結したことによって身近な政治の選択として認識された。国政は一気に劇場化し、二〇〇五年九月十一日におこなわれた第四十四回衆議院議員総選挙は投票者自身が政策の判断をもっとも明確に意識した選挙となった。その結果はまぎれもなく私たち「国民」の選択であり、

先の問題の本質も同じところにある。小泉内閣時代のさまざまな規制緩和はより利便性の高い社会を私たちが希求した結果であり、現在の日本がその延長戦上にあることは間違いない。それは同時期における世界史の潮流とみごとに一致している。

2　日本における移民問題とアイデンティティ

そのような意味で、先にかかげた欧米の移民問題を日本の社会にトレースすることはきわめて妥当な課題設定である。日本の古代では帰化人・渡来人という移民を受け入れてきた歴史があり[6]、また、近代においては朝鮮半島、中国大陸への侵略の歴史がいわゆる在日韓国人・在日朝鮮人、在日中国人という「移民」を生み出している。逆に、近世初期には朱印船貿易の展開によって東南アジア各地に日本町が形成され、明治時代以降は多くの日本人が北米大陸の西海岸や太平洋地域、南米大陸、中国東北部（旧満州）へ移住している[7]。日本は歴史的にみて多くの移民を受け入れ、そして多くの移民を輩出している国である。

現在の日本における外国人労働者、すなわち移民の問題はそういった歴史の延長線上でとらえるべきである。最近、街なかのコンビニエンスストアや建築現場で彼、彼女たちを目にしないことはない。現代の日本社会において移民は非常に身近な存在になっているはずだが、政府の対応策は「移民」そのものを認めようとしない頑迷なものである。くわえて、国や自治体の行政だけでなく、これを受け入れる私たちの意識にもほとんど変化がみられない。先に述べたようなヨーロッパやアメリカでの問題はけっして別世界の出来事ではない。これから起こりうる未来の日本社会の問題なのである[8]。移民による多文化社会はグローバル化が進展する歴史過程の必然であり、今後の日本はそれを意識的に構築する必要がある。

この問題にその根源としての自他認識という課題が折り重なってくる。目の前で生活する他民族の存在は、アイデンティティという問題を私たちの日常生活において突きつけるはずである。しかし、自己と他者との区別を何の思考も経過せずに民族や国家に安易に求めた場合、本質であるはずの自己への探求を無意識にペンディングしてしまう。自分自身に対する思惟のない自他認識は異質なもの、理解できないものの排除につながり、そこに他者との対立を誘発する。

したがって、国家や国民、民族といった観念と自己に対する認識を明確に区分しつつ、私たちはそれらの双方を誠実に追求するべきである。国家や国民、民族といった概念は流動的かつ多義的な歴史上の観念であるが、[9] そのような問題性を自覚したうえで、錯綜する現代の国家と民族、社会のなかで私たちは個人のアイデンティティを練り上げていかなければならない。すなわち、私たちは自分自身と社会や国家との関係をどのように切り結ぶべきなのか。アイデンティティの構築は非常に個人的な問題でありながら、すぐれて社会的・国家的な課題なのである。

3　現代国家における史書研究の意味

戦後国際政治の「勝者」であるアメリカがその勢力を維持するということは、同国の支持する新自由主義経済・市場原理主義がこれまで以上に推進されるということである。バイデン大統領は、政治・外交的には協調主義路線をとると予想されるが、アメリカ経済が同じように推移するとは思えない。社会主義国家群に勝利した資本主義国家の究極を志向するアメリカという現代国家のあり方は、その反作用としての新たな国家像を模索させる。巨視的な視野にもとづいたグローバル・ヒストリーの流行はその歴史的背景の確認であり、[10] 理想主義的な共産革命への憧憬やポスト資本主義社会の議論はその具体的なあらわれである。[11] 現代において国家の意味は反転的に上昇している。

一見矛盾するようだが、グローバル化によって生じているこのような問題はシステム的には国家が回収するしかない。国境をこえた地球全体の問題は個人によって解決される性質のものではなく、不特定多数の力が必要であるという意味で、すぐれて非個人的かつ社会的・国家的な課題である。もちろん、そういった課題解決を理由に特定の権益者のために政治が利用されてはいけないし、国家という全体に依存して自ら思考しない個人を生み出してもいけない。[12]

個人のアイデンティティがその生い立ちによって規定されるのと同様に、国家のアイデンティティはその歴史によって規定される。[13] どのような国家も必ず〈神話〉を起点とする歴史をもっており、その〈神話〉が時代によって読みかえられて現実の政治・社会において機能している。[14] 国家による史書はその国家の由来と理念を示す。実際に起こった事実やその意味を目的に応じて変化させ、それを〝史実〟として位置づけて共有する記述方法は史書という書物のもつ独特のスタイルである。

私たちが他人に対してその存在を認識する場合、その人の個性や才能をその根拠とすることが最善である。しかし、相手に関するそのような情報や認識が不十分である場合、現実的にはその個人の属する国家や民族が問われることが多い。国家や民族の歴史は他者にとっての認識という意味である程度一般化することが可能であり、そこから未知の個人を推し量ることができるからである。国家や民族の歴史をある特定の言語で理念的に表現した史書はその縮図という意味合いをもつのである。[15]

したがって、私たちはこれからの社会や自分自身を理解するために、国家の歴史とそれを記してきた史書を知る必要がある。そこから現代国家を問う一つの視座が得られるからである。筆者の考える古代史書を現代社会において考究する意味は以上のようになる。それはけっして過去の事実の探り合いではなく、すぐれて現代史的な課題な

のである。

第二節　本書の構成

1　本書の概略

前節で述べた問題意識をもとに、本書は七世紀から十世紀にかけての古代史書について考察する。それは帝紀を中心とする六国史以前の史書と六国史とに大きく分けることができる。第一部では律令制国家成立以前の史書である天皇記・国記、『上宮記』、『古事記』の各書の成立と内容を政治史・国家史をベースに考えていく。第二部ではこれを継承する六国史の編纂体制についてその資料や作業といった視点から基礎的な考察をおこない、最後の第三部で六国史のうち『日本書紀』『続日本紀』『日本後紀』、そして『日本三代実録』について検討を加える。史料の残存度によって第一部と第二・三部の考察方法は大きく異なるが、国家が歴史書を編纂し、これをイデオロギー支配に用いたという視点は共通している。

2　六国史以前の史書

古代日本の史書は帝紀・旧辞に始まるが、その成立過程に関する考察は第三章のあとに置いたコラム「帝紀・旧辞の成立」において略述している。[16] 通説では六世紀中頃の欽明朝に帝紀・旧辞が成立（文字化）したと考えられているが、四～六世紀には高句麗や新羅・百済で史書の編纂がおこなわれている。筆者は雄略朝における国内外の政治情勢と稲荷山古墳出土鉄剣銘の分析から帝紀の成立を五世紀後半までさかのぼらせ、旧辞の文字化はそれより遅

く推古朝（六世紀末～七世紀前半）まで引き下げている。紙幅の関係で十分な考証は展開できていないが、本書における「史書」史の時系列では最初のものになる。

第一章「天皇記・国記考」は推古朝に編纂された史書である表題の二書について考察した。その史料としては『日本書紀』皇極四年（六四五）六月己酉条、『新撰姓氏録』序が重要であり、これまで依拠してきた『日本書紀』推古二十八年（六二〇）是歳条は皇極紀を補完する条文である。この史料操作により「天皇記」「国記」という書名に限定されない考察が可能となり、先の史料読解にも新たな視点をもたらすことができる。すなわち、天皇記は乙巳の変（六四五年）において意図的に焼却された蘇我系の帝紀であり、国記は戸籍的な役割を担った氏族系譜である。

第二・三章は第一章の詳論である。第二章「王統譜としての天皇記」はさまざまな視角から言及された天皇記の先行研究を整理して問題点を明らかにし、その具体相の解明に努めた。本文がまったく伝わらない天皇記であるが、これを帝紀としてとらえれば正倉院文書や『日本書紀』の分注など検討すべき史料は複数見出せる。それらを分析すると天皇記は全三巻で神代から推古朝までを収録しており、その記述は漢文ではなく和語が基本で、年紀もなかったものと考えられる。

第三章「氏族系譜としての国記」は、国記を史書とみなす通説に対して同書を戸籍の機能を担った氏族系譜としてとらえている。五世紀後半に存在した帝紀と稲荷山古墳出土鉄剣銘のような「中央の王統譜―地方の氏族系譜」という関係はそのまま「天皇記（帝紀）―国記（氏族系譜）」にうけつがれていく。氏族系譜は集団の観念的な維持装置としてだけではなく、現実の政治支配においてもその機能を発揮している。朝鮮半島への外征を展開した推古朝の国政を支えたのは国記である、というのがここでの理解である。

第四章「上宮記考」は後世の史料から同書の内容を復元している。『上宮記』の逸文は平安時代の『日本書紀私記』丁本、鎌倉時代の『釈日本紀』『聖徳太子平氏伝雑勘文』などに残っているが、それらの検討から同書は〈聖徳太子〉に仮託された系譜（史書）であることが分かる。さらに室町時代の『太子伝玉林抄』によれば、中世の法隆寺には上宮記を天皇記とする認識があり、『上宮記』は上宮王家（山背大兄王・春米女王）によって作成された天皇記の異本と考えられる。

第五章「古事記再考―その史料批判と「史書」史の位置づけ―」は、序偽作説にたって『古事記』が天皇記を祖本とした七世紀末の帝紀であることを述べている。序文によれば『古事記』は和銅五年（七一二）に稗田阿礼が誦習した帝紀・旧辞を太安万侶が筆録したことになっているが、その作業工程と本文とのあいだには種々の疑問がある。神話論や古典文学における意義や価値は別として、王代記というスタイルの史書である『古事記』を批判的に検討することは日本古代史学界の大きな課題である。当該期の国家史や平安期の講書の実態からみて「記紀」が同時期に編纂され、等しい価値を有したとはやはり考えにくい。

付章1「日本と朝鮮の古代史書」は遠藤慶太氏の『日本書紀』に関する諸論考の評論をもとに、これに関連する問題について論じている。そこでは史書形成の国内的な契機を重視しつつ、新羅・高句麗・百済の朝鮮三国の史書の成立過程を概観している。近年では律令制の導入を新羅との関係においてとらえるのが一般的だが、「史書」史においても同様の視点は必要であろう。

3　国史の編纂作業と実録

第六章「国史の編纂と実録」は図書寮の恒常的な業務に天皇の一代記である「実録」の作成がふくまれるか否か

を検討している。『令集解』その他の史料解釈から実録編纂の可能性を説いたが、その後に発表した第七章および付章2にて見解を修正している。その点で割引が必要な論考だが、実録編纂の可能性を最大限に引き出していること、実録の存否に関する先行研究とその論点を網羅していることなどから本書に収録した。

第七章「国史編纂の資料と作業」は国史の編纂体制における原資料のあり方と作業過程を考察している。そのさいに論点となるのが実録の存否だが、先に述べたように筆者は実在説に立っている。ここでは国史編纂の材料となる各種の資料が官司ごと、年代順に集積されて図書寮の倉庫で保管されていたこと、編纂作業では担当者制がとられていたことなどを論じた。イデオロギー的な分析だけでなく、技術的な問題を取り扱うことによって史料に立脚した議論が成立することは大切である。(17)

付章2「実録編纂に関する補考」は第六・七章の追考である。細井浩志氏の著書『古代の天文異変と史書』（吉川弘文館、二〇〇七年）の書評を通じて実録の編纂について再論している。一定の完成度をもった実録が恒常的に編纂されていたとは考えられないが、逆にそのようなものがまったく作成されなかったとも思えない。現在は、その時々の政治情勢によって国史の編纂作業に粗密があったという理解にいたっている。

4　六国史の研究

第八章「戦後六国史研究の潮流」では六国史に関する研究を整理してその展望を述べている。六国史の研究は『日本書紀』から始まって順に進展していくが、研究が前半に集中していることは明らかである。また、史書研究はそれのみで展開しているわけではなく史料学の進展と密接に関連している。「史書」史の研究は各書の確実な基礎研究を積み重ねたうえで比較文化論や国家史の問題として広くとらえるべきであり、本書全体の視座もそのよう

なところに設けている。

第九章「成立前後の日本書紀」は『日本書紀』を理解するさいにもっとも重要な神代巻の「一書」について論じた。本文の秩序を譲らずにさまざまな異説を取り込む「一書」は貴族制的要素の強い日本の古代国家を象徴したものであり、現代にいたる天皇制の柔構造を象徴している。また、「或本」「旧本」「別巻」などは『日本書紀』の編纂過程で作成された稿本であり、同書のバリエーションは成立の前後からさまざま形で存在していた。中世日本紀に類似する『日本書紀』の読解は奈良時代においても存在したのである。(18)

第十章「続日本紀の歴史認識―長屋王の「誣告」記事をめぐって―」は長屋王の変（七二九年）の記述から『続日本紀』の編纂過程における歴史認識を考察した。歴史上の事件である政変の評価は史書において必ずしも一定しない。史書の編纂自体がその評価の連続であり、歴史は過去に存在した事実ではなく、その時代々々における歴史認識の集積である。その意味でここで取り上げた問題は史書の特性をよくあらわしている。

第十一章「日本後紀の可能性」は大平和典氏の著書『日本後紀の研究』（国書刊行会、二〇一八年）の書評を通じて『日本後紀』の史書としての可能性を探っている。史料そのものに対する分析だけでなく、その後の受容史・読書史といった視点は古代史書研究の射程を広げるものであり、残存巻が少ない『日本後紀』だからこそ提示できる視点や考察方法がある。六国史の研究は『日本書紀』『続日本紀』まで順調に進んでいるが、今後は『日本後紀』以降の研究により意図的に取り組むべきである。

第十二章「日本三代実録の別称「外記番記」」は六国史の最後である『日本三代実録』の別称に関する考察である。通説ではこれを「外記番記」とするが、その史料的根拠である南北朝時代の『惟賢比丘筆記』には書写過程での誤りがあり、両者は無関係である。これは単なる名称の問題ではなく、国史の編纂資料や後世における史書の認

識の問題に関係してくる。

第十三章「「記紀」以外の古代史書―『大倭本紀』と『仮名日本紀』を中心に―」は奈良時代に存在したと考えられる副題の二書を中心に古代の史書全般について考察した。いわゆる「記紀」には多くの研究蓄積があるが、今後はそれ以外の史書の存在に目を向けるべきである。それは「記紀」に対する認識を平準化し、それ自体の可能性をさらに広げることにつながる。また、『日本書紀』の講書に関する考察も重要で、それは古代における同書の受容史を解き明かすことになる。

5　本書のまとめと課題

終章「古代国家の形成と史書」は右の各史書の研究を国家史の流れに落とし込んだ本書のまとめである。政治史に偏るきらいがあると指摘される史書研究であるが[19]、これまで述べたように史書の編纂と記述は政治史そのものである。とくに王統譜である帝紀・旧辞、「国史」と呼称される六国史の各書は国家史の格好の材料となる。六国史以前は「帝紀＋氏族系譜」という構成だが、律令制国家の成立以後はそれが「国史」に集約される。その国史編纂の企画の終焉は『日本書紀』の講書の終わりとも時期的に重なっており、史書が国家の展開と密接に関係していることを示している。

以上の論考を少しでも現在の研究水準に近づけるため、各章には［補記］を設けてその後の研究や現在の筆者の考えを追加し、注で引用した文献の典拠などを更新した。また、読解の便宜を考慮して初出時より節題を改めて項を新設した章があり、文章表現も一書として調整を施している。そのうえでの記述や参考文献の重複は本書を章ごとに読むことを想定したものであり、ご了承いただければ幸いである。

第三部「六国史の研究」における『日本後紀』と『日本三代実録』に関する考察は両書の核心に迫るものではなく、また『続日本後紀』と『日本文徳天皇実録』に関して言及するところがないのは本書の大きな欠点である。今後の課題としたい。

おわりに

本書の考察対象は日本の古代史書だが、その具体的な編纂や保管の方法、歴史認識の形成という意味では書物そのものに対する考察でもある。[20] また、第二・三部のコラムでは武家政権による中・近世の史書や近・現代の天皇実録について概観したが、その編纂作業や資料、事業の途絶の事情やその稿本の残存など、それらと古代史書とのあいだには意外なほど多くの共通点がみられる。これは日本の「史書」史全体の特徴としてとらえられる。[21] 序章を終えるにあたって、ささやかながら右の二点を古代史書に限定されない本書の意義として付け加えておきたい。

イタリアの歴史哲学者ベネデット・クローチェ（一八六六～一九五二）は「歴史」が徹底して現代社会の問題であることを説いた。[22]「すべての真の歴史は現代の歴史である」という命題とともに、その現代史という「生から発生した問題を解くところの認識がどうして不要であり得ようか」という言葉はとてもあざやかで力強い。[23] 第一節で述べた問題意識は筆者というごく小さな存在から発せられたものである。しかし、自分が身を置いている中学・高校という学校教育の現場で、そして多少なりともかかわっている研究という世界で、本書によってそれが何らかのかたちで他者と共有されるのであれば本懐である。

注

（1）フランシス・フクヤマ著、渡部昇一訳『歴史の終わり』上・下（知的生き方文庫、一九九二年。原著同年）。

（2）内藤正典『ヨーロッパとイスラーム―共生は可能か―』（岩波新書、二〇〇四年）、同『イスラームからヨーロッパをみる―社会の深層で何が起きているのか―』（岩波新書、二〇二〇年）。

（3）永吉希久子『移民と日本社会―データで読み解く実態と将来像―』（中公新書、二〇二〇年）。

（4）西山隆行『移民大国アメリカ』（ちくま新書、二〇一六年）、貴堂嘉之『移民国家アメリカの歴史』（岩波新書、二〇一八年）。

（5）田中研之輔『ルポ　不法移民　アメリカ国境を越えた男たち』（岩波新書、二〇一七年）。

（6）九世紀の日本の氏族目録である『新撰姓氏録』に記載される氏族の約三〇％が帰化人系であり、古代史家の関晃氏（一九一九～一九九六）に「われわれは、誰でも古代の帰化人の血を一〇％や二〇％はうけていると考えなければならない。（中略）帰化人はわれわれの祖先なのである」という有名な言葉がある（『帰化人―古代の政治・経済・文化を語る―』講談社学術文庫、二〇〇九年、一二頁。初出一九六六年）。

（7）西山・貴堂注（4）書、日本移民学会編『日本人と海外移住―移民の歴史・現状・展望―』（明石書店、二〇一八年）、木村和男ほか『カナダの歴史―大英帝国の忠誠な長女　1713-1982―』（刀水書房、一九九七年）、山中速人『ハワイ』（岩波新書、一九九三年）、矢口祐人『ハワイの歴史と文化―悲劇と誇りのモザイクの中で―』（中公新書、二〇〇二年）、山口誠『グアムと日本人―戦争を埋立てた楽園―』（岩波新書、二〇〇七年）、堀坂浩太郎『ブラジル―跳躍の軌跡―』（岩波新書、二〇一二年）、二松啓紀『移民たちの「満州」―満蒙開拓団の虚と実―』（平凡社新書、二〇一五年）。

（8）永吉注（3）書終章「移民問題から社会問題へ」。

（9）ダントレーヴ著、石上良平訳『新装版　国家とは何か―政治理論序説―』（みすず書房、二〇〇二年。原著一九六七年）三四～四四頁、ジェームズ・C・スコット著、立木勝訳『反穀物の人類史―国家誕生のディープヒストリー―』（みすず書房、二〇一九年。原著二〇一七年）五七・一一一頁、スーザン・ストレンジ著、西川潤・佐藤

元彦訳『国家と市場―国際政治経済学入門―』（ちくま学芸文庫、二〇二〇年。原著一九九四年）、塩川伸明『民族とネイション―ナショナリズムという難問―』（岩波新書、二〇〇八年）。

(10) ウィリアム・H・マクニール著、増田義郎・佐々木昭夫訳『世界史』上・下（中公文庫、二〇〇八年。原著一九九九年）、ジャレド・ダイアモンド著、倉骨彰訳『銃・病原菌・鉄』上・下（草思社文庫、二〇一二年。原著一九九七年）、ユヴァル・ノア・ハラリ著、柴田裕之訳『サピエンス全史―文明の構造と人類の幸福―』上・下（河出書房新社、二〇一六年。原著二〇一一年）。

(11) 柄谷行人『世界史の構造』（岩波現代文庫、二〇一五年。初出二〇一〇年）、広井良典『ポスト資本主義―科学・人間・社会の未来―』（岩波新書、二〇一五年）。

(12) ナオミ・クライン著、幾島幸子・村上由見子訳『ショック・ドクトリン―惨事便乗型資本主義の正体を暴く―』上・下（岩波書店、二〇一一年）、ハナ・アーレント著、大久保和郎ほか訳『新装版　全体主義の起源』一～三（みすず書房、一九八一年。原著一九五五年）。

(13) 高坂正堯『国際政治―恐怖と希望―』改版（中公新書、二〇一七年。初版一九六六年）、入江昭『歴史家が見る現代世界』（講談社現代新書、二〇一四年）。

(14) E・ホブズボウム、T・レンジャー編、前川啓治ほか訳『創られた伝統』（紀伊國屋書店、一九九二年。原著一九八三年）、アントニー・D・スミス著、巣山靖司ほか訳『ネイションとエスニシティ―歴史社会学的考察―』（名古屋大学出版会、一九九九年。原著一九八六年）、古川隆久『建国神話の社会史―史実と虚偽の境界―』（中公選書、二〇二〇年）、カッシーラー著、熊野純彦訳『国家と神話』上・下（岩波文庫、二〇二一年。原著一九四六年）。この場合の〈神話〉は必ずしも神々の物語に限定されない。〈神話〉とはその国家の根源を支えるイデオロギーであり、それは民族によって創造された神々であってもよいし、実際に存在した英雄や建国者でもかまわない。

(15) ベネディクト・アンダーソン著、白石隆・白石さや訳『定本想像の共同体―ナショナリズムの起源と流行―』〈社会科学の冒険二期四〉（書籍工房早山、二〇〇七年。原著一九九一年）。

(16) 拙著『六国史以前―日本書紀への道のり―』（吉川弘文館、二〇二〇年）「帝紀・旧辞と倭王権―五・六世紀の史

書―」の章でやや詳しく述べている。

(17) 拙稿「「記紀」の成立」(新古代史の会編『テーマで学ぶ日本古代史』社会・史料編、吉川弘文館、二〇二〇年)。

(18) 拙稿「『日本書紀』の読書史と『古事記』―『日本書紀一三〇〇年史を問う』『読み替えられた日本書紀』を読んで―」(『歴史学研究』一〇二〇、二〇二二年)においてこの問題に関する理論的な考察をおこなっている。

(19) 丸山裕美子「古代　八」(『史学雑誌』一一七―五、二〇〇八年)。

(20) 書物史全般については、銭存訓著、宇都木章ほか訳『中国古代書籍史―竹帛に書す―』(法政大学出版局、一九八〇年。原著一九六二年)、呉建中ほか著、沈麗云ほか訳『中国の図書館と図書館学―歴史と現在―』(京都大学図書館情報学研究会、二〇〇九年)、ライオネル・カッソン著、新海邦治訳『図書館の誕生』(刀水書房、二〇〇七年。原著二〇〇二年)、小杉泰・林佳世子編『イスラーム書物の歴史』(名古屋大学出版会、二〇一四年)などを参照。

(21) 五味文彦「解説」(坂本太郎『日本の修史と史学―歴史書の歴史―』講談社学術文庫、二〇二〇年)では、日本「史書」史の課題として戦国期の歴史書や水戸藩以外の諸藩の歴史書、戦後の自治体史、近現代の天皇実録の分析が説かれている。

(22) クロォチェ著、羽仁五郎訳『歴史の理論と歴史』(岩波文庫、二〇〇二年。原著一九一五年)。

(23) クロォチェ注(22)書一七、二〇頁。傍点は原文による。

索　　引

書名・史料名

帝紀・旧辞，天皇記・国記は省略した。第一部のコラム，第１～３章，
終章などを参照してもらいたい。なお、※印を付したものは逸書である。

『古事記』

序文 ……第５章, 9, 81, 352, 367, 386
神代記 ……358
綏靖段 ……123
懿徳段 ……123
孝元段 ……124
開化段 ……123
崇神段 ……89, 123, 379
仁賢段 ……49, 60
顕宗段 ……88, 122, 123, 137
履中段 ……52, 184
允恭段 ……145, 380
安康段 ……128
雄略段 ……146
継体段 ……123, 165
用明段 ……127
崇峻段 ……128
推古段 ……122, 123, 128

『日本書紀』

神代上（第１～８段）……159, 274, 276-279, 281, 289, 290, 293, 356, 358
神代下（第９～11段）……159, 275, 281, 289, 293
綏靖２年正月条 ……280
安寧３年正月壬午条 ……280
崇神10年９月甲午条……379
〃　60年７月己酉条 ……280
垂仁２年是歳条……36
景行２年３月戊辰条 ……280
仲哀９年２月丁未条……73
応神元年正月朔条 ……287
〃　16年是歳条 ……45
允恭４年９月戊申条 ……41, 380
〃　５年７月己丑条 ……125
顕宗即位前紀 ……52, 96
〃　元年正月己巳朔条 ……283
〃　３年是歳条 ……45
履中４年８月戊戌条 ……184
〃　６年正月辛卯条 ……184
雄略４年２月条 ……146
〃　７年是歳条 ……45
〃　22年７月条 ……284
武烈４年是歳条……45
継体即位前紀 ……128
継体25年12月庚子条 ……283, 285
欽明２年３月条 ……42, 52, 96, 280, 381

欽明12年是歳条……45
〃　14年7月甲子条……42, 78, 191, 381
〃　30年正月辛卯条……42, 79, 191
〃　〃　4月条……42, 79, 191
敏達3年10月丙申条　……42, 79, 191, 381
〃　12年是歳条　……45
〃　13年是歳条　……45
〃　14年6月条……283
用明元年正月壬子条　……126
崇峻5年11月乙巳条……128
推古2年2月丙寅条……68
〃　8年是歳条……45
〃　11年11月己亥条……68
〃　〃　〃　是月条……68
〃　12年4月戊辰条　……68
〃　13年4月辛酉条　……69
〃　〃　閏7月己未条　……69
〃　14年7月条　……69
〃　〃　是歳条　……69
〃　15年2月甲午条　……69
〃　16年6月丙辰条　……42
〃　17年4月庚子条　……42
〃　18年10月丁酉条……69
〃　20年2月庚午条……48, 75
〃　28年10月条……81
〃　〃　是歳条　……第1・3章, 8, 50, 62, 106, 185, 186
〃　31年11月条　……69, 70
〃　〃　是歳条……69, 70
〃　32年4月戊申条　……70
皇極元年是歳条　……45, 110
〃　2年10月戊午条……117
〃　〃　11月丙子条……118
〃　4年6月己酉条　……第1・3章, 8, 50, 191, 383
大化元年8月庚子条……384
〃　〃　9月丙寅条　……45
〃　〃　〃　戊辰条　……45
〃　〃　〃　丁丑条　……45
〃　5年是歳条……45
斉明2年是歳条……45
〃　3年是歳条……45
〃　4年正月条……45
〃　5年7月戊寅条　……224, 362
白雉5年2月条　……58, 191, 382
天智7年2月戊寅条……45
〃　10年正月是月条　……36
天武5年是歳条　……291
〃　10年3月丙戌条　……40, 60, 80, 139-141, 191, 280, 284
〃　11年3月丙午条　……59
持統5年8月辛亥条　……36, 284

『続日本紀』

文武4年3月己未条……76
慶雲元年正月癸巳条　……165
和銅4年4月壬午条　……165
〃　〃　7月甲戌条……169
〃　5年5月乙酉条　……169
〃　7年2月戊戌条　……169, 197, 199, 202, 208, 218, 230
霊亀元年正月癸巳条　……165
〃　2年9月乙未条　……165
養老7年7月庚子条……165
天平元年2月癸酉条……316
〃　〃　4月癸亥条……317
〃　2年9月庚辰条　……316
〃　8年11月丙戌条……200, 215
〃　9年12月丙寅条……300
〃　10年7月丙子条……295, 300, 313
〃　12年9月癸丑条……315
天平宝字元年6月甲辰条　……197, 202, 208
〃　〃　7月甲寅条……316
〃　〃　〃　庚戌条……226

天平宝字 8 年 10 月壬申条 ……217, 236
天平神護元年 10 月庚辰条……217
〃 〃 11 月癸酉条……217
宝亀元年 5 月壬申条 ……200, 215
〃 〃 8 月丙午条 ……317
〃 3 年 2 月癸酉条 ……315
〃 〃 3 月癸未条 ……316
〃 4 年 10 月辛酉条 ……316
〃 6 年 4 月己丑条 ……316
〃 11 年 12 月甲辰条 ……317
延暦 4 年 9 月乙卯条 ……285
〃 〃 〃 丙辰条 ……285
〃 〃 〃 庚午条 ……285
〃 〃 10 月庚午条 ……316
〃 7 年 6 月甲申条 ……236
〃 8 年 3 月戊午条 ……236
〃 9 年 7 月辛巳条 ……153, 199
〃 〃 〃 辛未条 ……236

『日本後紀』

延暦 13 年 8 月癸丑条 ……223, 238
〃 16 年 2 月癸酉条 ……221
〃 〃 〃 己巳条……223
〃 18 年 12 月戊戌条 ……31, 351
大同 4 年 2 月辛亥条 ……150
弘仁元年 9 月丁未条 ……285
〃 3 年 6 月戊子条 ……153

『日本文徳天皇実録』

序文 ……221
斉衡 2 年 2 月丁卯条 ……221

『日本三代実録』

序文 ……221
元慶 7 年 11 月 29 日壬辰条 ……226
貞観 5 年 5 月 20 日壬午条……316
仁和 3 年 8 月 26 日丁卯条……343

その他の国内史料

『吾妻鏡』（東鑑）……250-253
『伊吉連博徳書』※ ……224, 362
『惟賢比丘筆記』 ……第 12 章, 11, 220
『因幡国伊福部臣古志』……38, 41, 75, 86
『宇比山踏』……372
『内舎人日誌』……347
『栄花物語』……385
『延喜式』 ……90, 354
『大鏡』……385
『懐風藻』 ……37, 298
『仮名日本紀』※ ……第 13 章, 12, 100, 101, 118, 143, 158, 172, 287, 289
『寛政重修諸家譜』……251
『官曹事類』※ ……228, 266
『勘仲記』……119
『看聞日記』……325
『玉葉』……250, 341
『金槐和歌集』……250
『琴歌譜』……147, 148
『公望私記』※……371
『公卿補任』……310
『百済記』※……178, 180
『百済新撰』※……179, 180
『百済本記』※……179, 180
『群書類従』……253
『外記日記』※……220, 221, 233, 235, 241, 332, 342, 343
『外記番記』※ ……第 12 章, 11, 220, 343
『源氏物語』……250
『孝明天皇紀』……345
『古語拾遺』……134, 152, 156, 171, 184, 294, 333, 334, 354, 369
『古事記裏書』……357, 369, 374
『御日記』……251
『籠名神宮祝部丹波国造海部直等之本記』

……86
『山家最要略記』……334, 336
『三宝絵』……102-105, 116
『侍従日記』……346
『侍従日誌』……347
『氏族志』※……31
『七代記』……25
『四天王寺縁起』……116
『釈日本紀』……9, 49, 60, 93-95, 112, 128, 145, 147, 148, 287, 288, 291, 325, 328, 349, 356, 357, 361, 364-366, 368, 369, 374, 375
秘訓三・欽明……363
述義三・神代上……291, 356
述義四・神代下……358
述義八・雄略……85, 146, 285
述義九・欽明……114, 363
述義十・斉明……287, 362
『上宮記』※……第4章, 1, 7, 9, 57, 60, 61, 91, 121, 143, 158, 160, 161, 172, 350, 353-356, 369, 389
一云……49, 60, 94-96, 98, 116, 128
巻下「注云」……49, 60, 97, 103, 111
『上宮聖徳法王帝説』……51, 126, 127
『上宮太子御記』……104
『聖徳太子伝暦』……25, 61, 97, 104, 107
『聖徳太子平氏伝雑勘文』……9, 49, 57, 60, 93, 97, 99, 103, 108, 112, 116
『昭和天皇実録』……347, 348
『書紀集解』……37, 52, 53
『諸道勘文　神鏡』……373
『新儀式』……210, 217, 229
『新国史』（続三代実録）※……240, 242, 253, 259, 266, 341, 342, 344, 385
『新撰亀相記』……90, 152, 156, 171
『新撰姓氏録』……14, 30, 31, 39, 150, 152, 153, 156, 322, 351
上表文……31
序……第1章, 8, 30-32, 34, 40, 41, 50, 72-74, 149, 383
『神別記』※……359
『神代正語』……372
『続群書類従』……333-336, 343
『続徳川実紀』……252, 253
『政事要略』……59, 147, 148
『先代旧事本紀』……25, 86, 100, 101, 116, 134, 142, 143, 147, 148, 156, 157, 161, 171-173, 334, 350-352, 354, 357-359, 369
醍醐寺本『諸寺縁起集』……309
『太子伝玉林抄』……9, 19, 57, 61, 99, 107, 117, 118
『大正天皇実録』……346-348
『大進帝紀』※……56
『大日本古文書』
3巻84-91頁……54
7巻8-32頁……56
24巻378・379頁……55, 369
『高橋氏文』……151, 152, 156, 171
『多氏古事記』※……85, 145, 146, 148
『玉勝間』……290, 372
『丹後国風土記（逸文）』……284-286
『帝王編年記』……125
『帝王本紀』※……52, 53, 60, 96, 98
『帝記』※……51
『帝紀二巻』※……54-56, 65
『訂正　古訓古事記』……170
『天寿国曼荼羅繡帳縁起勘点文』……102, 103, 116
『天長格抄』※……228, 266
『天台座主記』……250
『東宝記』……322
『徳川実紀』（御実紀）……250-253
『内記日記』※……220-222, 230
『難波吉士男人書』※……224

『日本逸史』……321, 323
『日本紀問答』※ ……119
『日本紀略』 ……147, 240-242, 259, 285-288, 306, 309, 321, 323, 344, 363
反正即位前紀 ……286
延暦 4 年 9 月庚申条 ……316
〃 〃 〃 乙卯条 ……285
〃 〃 〃 丙辰条 ……285
〃 〃 〃 庚子条 ……285
大同 2 年 11 月乙酉条……316
〃 〃 〃 乙未条 ……316
『日本書紀私記』
甲本 ……100, 150, 153, 155, 157, 171, 350, 361, 366
弘仁私記序（甲本） ……31, 33, 100, 147, 149, 150, 153-155, 157, 158, 281, 350, 351, 353, 359, 366, 371, 384
乙本・丙本 ……100, 350, 361, 365, 366, 368
丁本 ……9, 60, 99-101, 103, 119, 142, 143, 149, 155, 157, 159, 161, 171, 172, 350-356, 360, 361, 368, 374, 375, 381
『日本書紀通証』……52, 53
『日本書紀通釈』……52
『日本逸史』……321, 323
『日本帝記一巻』※ ……55, 56, 65, 356
『日本霊異記』……104, 134, 316
巻上・5 縁 ……38
巻中・1 縁 ……302, 304, 310
『女官日誌』……347
『後鑑』……250, 252
『百錬抄』……344
『武家補任』……251
『扶桑略記』……323, 361, 385
『譜第』※ ……52, 96, 98, 370
『風土記』 ……59, 134, 159, 281（出雲国）, 289, 380（常陸国）, 380, 389（播磨国）
『平家物語』……250
『法隆寺伽藍縁起并流記資材帳』……38
『本朝月令』……147, 148, 151
『本朝書籍目録』……359, 366, 370, 374
『本朝世紀』 ……341-344, 385
『本朝法家文書目録』……228
『万葉集』……132-134, 147, 148, 169, 286, 288, 292, 363, 368, 370
巻 1-44 番歌……286
巻 2-90 番歌……144
巻 9-1740 番歌……284
巻 13-3263 番歌 ……145
『水鏡』……309, 323
『明月記』……250
『明治天皇紀』 ……345-348
『大倭本紀』（大和本紀）※ ……第 13 章, 12, 100, 101, 118, 143, 158, 172, 289, 291
『養老五年私記』※……366, 371
『養老律令』
公式令 82 案成条……226
〃 83 文案条 ……230
考課令最条 37 ……206
〃 38 ……205, 206
〃 39 ……216
雑令 8 秘書玄象条 ……197, 198, 204, 226, 231
職員令 3 中務省条 ……197, 198, 204, 225, 226, 231
〃 6 図書寮条 ……196-198, 201, 202, 230, 231
『令条記』……251
『令義解』（義解） ……18, 199, 203-206, 220, 226
『令集解』（集解） ……10, 18, 147, 148, 198, 199, 202, 204-206, 216, 225, 231
『類聚歌林』※……144, 145

『類聚国史』……18, 207, 221, 259, 266, 321, 323, 344
『類聚三代格』……271, 288, 344
『類聚符宣抄』……344
『類聚日本紀』……320, 323
『倭漢惣歴帝譜図』※ ……150, 151

金石文資料・木簡

『稲荷山古墳出土鉄剣銘』……7, 8, 17, 88, 99, 124, 378, 381, 383, 388
『太安万侶墓誌』……130, 165, 166
『元興寺塔露盤銘』 ……99, 118
『嶋評戸口変動記録木簡』……87

中国・朝鮮の史料

『漢書』……142, 203, 225
『漢書叙例』……42, 53
『魏書』……33
『芸文類聚』……237
『後漢書』 ……19, 142
『五経正義』……237, 247
『三国遺事』……185
『三国志』……142
『三国史記』 ……19, 185, 190
列伝 ……182, 191
新羅本紀 ……178, 182
高句麗本紀 ……182, 190
百済本紀 ……183, 184, 191
雑志 ……184, 191
『史記』 ……27, 142
『修文殿御覧』……225
『新集』（高句麗）※ ……49, 183, 184, 190, 192
『晋書』 ……52, 142, 236
『隋書』……19, 57
『唐律疏義』……134
『文選』……134
『留記』（高句麗）※ ……183, 184

研究者名

序章は日本古代・中世史分野に限定し，あとがきは省略した。

ア行

青木和夫 ……42-44, 163, 165, 168-170, 260, 291, 314, 316, 317
青木周平 ……167, 170, 289, 290, 372
明石一紀 ……290
浅尾広良 ……372
浅野啓介 ……45, 83
阿部泰郎 ……116
網野善彦 ……247, 268
嵐　義人 ……170, 173
有坂秀世 ……166, 167
飯田瑞穂 ……18, 113, 115-117
家永三郎 ……258
生田敦司 ……93, 106, 114-116, 292, 369
池田　温 ……196, 197, 200, 214-216, 218, 229, 389
池田昌広 ……292, 370
石井公成 ……118
石井　進 ……269
石上英一 ……64, 114, 215, 261, 263, 269
石川日出志 ……344
石崎正雄 ……270
石塚晴通 ……263
石原道博 ……19
石母田正 ……43, 44, 63, 168, 388
出雲路修 ……116
磯前順一 ……42
伊藤　聡 ……114, 292, 328, 369
伊藤匡芳 ……81, 82
稲岡耕二 ……167, 261
犬飼　隆 ……62, 166, 168, 173
井上　薫 ……217, 332, 390
井上幸治 ……235, 236
井上秀雄 ……190, 191
井上光貞 ……81, 163, 169, 258
井上　亘 ……268, 327, 344
荊木美行 ……170, 294
岩橋小弥太 ……41, 42, 44, 45, 196, 197, 214-217, 229, 230, 291, 328, 370, 371
岩宮隆司 ……83
上田正昭 ……44, 45, 135, 163, 168, 170, 173, 291, 379, 389
上野　誠 ……290
請田正幸 ……247
内田順子 ……41
梅澤伊勢三 ……82, 83, 164, 290, 390
榎　英一 ……43-45, 62, 72, 81, 83, 84, 173, 187, 191
榎本淳一 ……190, 292
榎村寛之 ……290, 369
遠藤慶太 ……付章 1, 9, 45, 81, 83, 121, 137, 163, 164, 196-198, 200, 201, 214-218, 229, 230, 235, 236, 245-249, 267-271, 289, 291, 292, 315, 317, 326-328, 369, 390
及川智早 ……170
大隅和雄 ……344
大島信生 ……290
太田晶二郎 ……64, 119

太田　亮 ……86, 389
太田善麿 ……41, 44
大津　透……84
大野　晋 ……133, 167, 171, 258
大野　透 ……167
大橋信弥……64
大平和典 ……第 11 章, 11, 271
大平　聡 ……63, 164, 189, 379, 389
大町　健 ……268
大山誠一 ……114, 116, 118, 314
大和岩雄 ……85, 163
岡田精司 ……164, 173, 388
岡田米夫 ……170
岡村秀典 ……391
小川　徹 ……290
小川豊生 ……368
沖森卓也 ……17, 18
荻原千鶴 ……63, 173, 291
小口雅史 ……235, 249
小倉慈司 ……245, 247-249
大日方克己 ……240, 247
小野田光雄 ……19, 369
小山田和夫 ……234, 328, 332, 342, 343
折口信夫……64

カ行

角林文雄
……41, 42, 44, 45, 63, 293, 379, 389
笠井純一 ……268, 269, 327
葛西太一 ……293
粕谷興起 ……170, 171
加藤　晃 ……216
加藤謙吉 ……83, 117, 293
加藤友康 ……261, 268, 269
加藤陽子 ……348
門脇禎二 ……49, 63, 165
鐘江宏之 ……85, 87
金井清一 ……166, 167, 169
金井塚良一 ……117
狩野　久 ……83, 84
鎌田純一 ……18, 41, 48, 49, 62, 63, 156, 157, 172, 173, 369
鎌田元一 ……45, 46, 48, 62, 81, 83, 84, 115, 169, 189, 247, 260, 318
鎌田宣之 ……117
亀井輝一郎 ……117
川口勝康 ……114, 379, 389
川尻秋生 ……118, 344
川副武胤 ……138, 166, 168, 169, 290
川田順造 ……389
河鰭公昭 ……242
河野貴美子 ……64, 114, 292, 368, 371
川本芳昭 ……390
神崎　勝……63
神田秀夫 ……166-168
菊地照夫 ……291
岸　俊男 ……45, 83, 208, 216, 218, 237, 238
北　康宏 ……43, 44, 49, 63, 81-84
木田章義 ……166, 169
北川和秀 ……116, 171, 172, 260, 368, 371
北原糸子 ……247
北村文治 ……196, 197, 214-216, 229
北山茂夫 ……343
鬼頭清明 ……208, 216, 236
木下礼仁 ……179, 189
木村茂光 ……267, 270, 344
木本好信 ……235, 292, 318
久保木秀夫 ……370
工藤　浩 ……18, 86, 170-173
熊谷公男 ……45, 81-83, 388
蔵中しのぶ ……291
蔵中　進 ……262
倉野憲司 ……81, 90, 91, 170, 290, 291
倉本一宏 ……50, 64, 236, 314, 390

栗原朋信 ……189
黒田達也……63
黒板伸夫 ……262
黒板昌夫 ……217, 332
久禮旦雄 ……46, 270, 291
呉　哲男 ……168
河内春人 ……164, 190, 317
神野志隆光……42, 48, 62, 64, 119, 136, 138, 165, 168-171, 292, 365, 368-371, 390
神戸航介 ……373
小路田泰直 ……81, 115
小島荘一 ……82, 370
小島憲之 ……64, 261, 292
小谷博泰 ……166, 167, 290
小林敏男 ……43, 44, 49, 63, 82, 379, 389
小林茂文 ……268, 318
小林宣彦……65
小林洋介 ……44, 45
小林芳規 ……172, 371
小峯和明 ……327
五味文彦 ……16, 114, 253, 368, 370
小宮秀陵……84
今野真二 ……344

サ行

佐伯有清 ……18, 41, 82, 331, 332
佐伯梅友 ……172, 371
西郷信綱 ……90, 91, 164, 166, 173, 174, 191
西條　勉 ……115, 159, 162, 167, 174, 372
齋藤　融 ……328
斎藤英喜 ……85, 114, 172, 173, 249, 271, 292, 328, 369, 371-373, 390
酒井芳司 ……117
坂上康俊 ……87, 169, 270
栄原永遠男 ……64, 84, 189
榊原史子 ……116
坂本太郎 ……16, 41-46, 48, 62, 63, 83, 85, 169, 171, 196, 197, 200, 214, 215, 217, 218, 229, 230, 235, 246, 253, 258-260, 264, 265, 268-270, 290, 291, 327, 332, 365, 370, 371
坂元義種 ……191
鷺森浩幸 ……117
桜井直文 ……371
笹川尚紀 ……41, 43-45, 48, 62, 72, 73, 81, 82, 84, 85, 115, 271
佐々木一紀 ……41, 44, 80
佐々木恵介 ……270
佐々田悠 ……63, 291, 318
笹山晴生 ……81, 200, 215, 218, 237, 261, 269, 315, 317
佐藤謙三 ……271, 328
佐藤　信 ……168. 247, 249, 268, 318
佐藤宗諄 ……237
佐藤長門 ……388, 391, 392
佐藤洋一 ……114, 369
志田諄一 ……164
篠川　賢 ……81, 115, 121, 132, 163, 167, 378, 388
篠原啓方 ……190
篠原幸久 ……63, 115, 164
志水正司 ……114
志水義夫 ……167
下垣仁志 ……391
下鶴　隆 ……53, 62, 64, 85, 114, 137, 168, 171, 368, 369
下出積與 ……292
白藤禮幸 ……261
新川登亀男……42, 44, 45, 50, 64, 81, 82, 84, 189, 271, 289, 328, 390
末松保和 ……19, 189-191
菅野雅雄 ……292
杉田建斗 ……373
杉本一樹 ……64

鈴木啓之 ……170
鈴木正信 ……86, 173
鈴木靖民 ……42, 192, 377, 388, 389
鈴木　豊 ……371
須原祥二 ……83, 268
住吉朋彦 ……114, 368
関　　晃 ……14, 42, 43, 45, 85, 118, 371
関　雄二 ……391
瀬間正之
……116, 134, 135, 167, 168, 170, 292
相馬　充 ……242, 247
薗田香融
……49, 63, 64, 82, 115, 117, 165, 191
曾根正人 ……80

タ行

高嶋弘志 ……196, 214
高取正男 ……316
高橋　亨 ……372
竹内理三……18
武田幸男 ……190
武田佐知子 ……63, 114, 368
武田祐吉
……64, 81, 164, 170, 271, 328, 379, 389
武光　誠 ……41, 62, 84, 113, 117
多田圭介 ……249, 271
多田　元 ……170
田名網宏 ……43-45
田中史生……42
田中　卓……49, 63, 82, 113, 114, 135, 168,
171, 173, 369
田中嗣人……41, 43-45, 114, 160, 174
田中俊明 ……190
田中良之 ……390
谷川清隆 ……242, 247
田村圓澄 ……48, 62
柄　浩司 ……207, 216
塚口義信
……113, 114, 164, 165, 379, 389, 391
告井幸男 ……271
土田直鎮 ……235
津田左右吉……44, 80, 82, 88, 91, 137, 168,
178, 189, 271, 290, 379, 380, 389
津田博幸 ……116, 171-174, 368
寺川真知夫 ……65, 163
寺崎保広 ……269, 314, 316
藤堂明保 ……19
藤堂かほる ……317
東野治之 ……18, 168, 237, 269, 327
遠山美都男 ……41, 44, 80, 83, 113, 116, 117
徳光久也……65
友田吉之助 ……370
虎尾俊哉 ……268

ナ行

直木孝次郎……43-46, 63, 64, 135, 147, 164,
168, 170, 216, 260, 261, 268, 327
永井紀代子 ……114
中川　收 ……第 10 章
中西康裕……第 10 章, 86, 195-197, 200, 207,
209, 213-217, 229, 230, 235, 236, 242,
245, 247, 248, 268, 269
中野高行 ……247
中林隆之……64
中村憲司 ……329
中村友一……83
中村啓信 ……290
長山泰孝 ……389
西岡和彦 ……373
西田長男 ……44, 64, 82, 83, 117
西宮一民 ……18, 165-167, 170, 171, 262,
289, 368, 369, 371
西本英夫 ……237

西本昌弘 ……234, 235, 266, 269, 308, 309, 316, 327, 344
仁藤敦史 ……46, 81-83, 85, 115, 117, 192, 218, 270, 390
野口武司 ……290

ハ行

橋本進吉 ……132, 133, 135, 166
橋本義彦 ……235, 327, 343
長谷部将司 ……43, 44, 171, 177, 189, 196, 214, 236, 247, 292-294, 317, 327, 328, 372
旗田　巍 ……190
濱田耕策 ……190, 387
早川庄八 ……83, 216, 235, 314
早川万年 ……81, 82, 84, 189, 271, 289, 328
林　幹彌 ……117
林　陸朗 ……235, 260
林屋辰三郎 ……43-46, 48, 62, 82
原　克昭 ……292, 328, 369
原　武史 ……348
原島礼二 ……48, 49, 62-64, 114, 192
春名宏昭 ……249, 317
久松潜一 ……170
日野　昭 ……49, 63, 64, 164
平泉　洸 ……43-45, 48, 62
平川　南 ……42, 118, 236, 270, 368
平田耿二 ……268, 314
平田俊春 ……370
平野あや ……290
平野邦雄 ……379, 389
広瀬和雄 ……81, 115
廣瀬憲雄 ……192
深津行徳 ……270
福田武史 ……114, 369-372
藤井信男 ……48, 62, 65, 173
藤實久美子 ……253
藤田亮策 ……190, 390
藤原猶雪 ……113
古市　晃 ……83
古橋信孝 ……173, 290
北條勝貴 ……247
星野　聰 ……261
細井浩志 ……付章 2, 10, 46, 65, 177, 189, 191, 195-198, 200, 201, 207, 209, 211, 212, 214-218, 229, 230, 235, 236, 267, 269, 270, 292-294, 318, 327-329, 344, 390
堀池春峰 ……260
堀口　修 ……348
本位田菊士 ……172
本郷真紹 ……117

マ行

前川和也 ……391
前田雅之 ……368
増尾伸一郎 ……371
増渕　徹 ……168
松木俊暁 ……248
松木裕美 ……196, 197, 207, 214, 216, 229
松崎英一 ……237, 260
松薗　斉 ……236, 237, 266, 270, 344
松田　猛 ……117
松田信彦 ……166, 290
松前　健 ……65, 166, 168, 290
松本直樹 ……137, 167, 168, 290, 369, 371
馬淵和夫 ……116
黛　弘道 ……41, 65, 80-82, 114-116, 161, 163, 164, 174, 248
丸山裕美子 ……16, 236, 247
三浦佑之 ……40, 81-83, 85, 121, 158, 162-164, 168, 173, 174, 292, 372, 390
三品彰英 ……45, 65, 293
水口幹記 ……171, 173, 237, 247, 318, 328,

369, 371
水谷千秋 ……64, 65, 114, 115
水野　祐 ……292
水野柳太郎 ……237, 268
溝口睦子 ……43, 91, 115, 164, 166-169, 192, 378, 388, 389
三谷栄一 ……166
皆川完一 ……114, 171, 235, 368, 369
宮川　久 ……314, 315
三宅和朗 ……63, 290
宮崎晴美 ……173
村尾次郎 ……41, 43, 44, 216
村尾元忠 ……216
村尾元融 ……208, 216
村尾義和 ……261
毛利憲一 ……45
毛利正守 ……262
桃木至朗 ……270
森　公章 ……84, 390
森　博達 ……82, 215, 236, 262, 268, 293
森田喜久男 ……291
森田　悌 ……117, 262, 268, 271, 314, 328, 329

ヤ行

八重樫直比古 ……118
矢嶋　泉 ……81, 115, 163, 164, 166
安村俊史 ……84
柳　宏吉 ……258, 292, 370
柳雄太郎 ……315
藪田嘉一郎 ……41-44
山尾幸久 ……43, 44, 46, 48, 62, 82, 83, 86, 164
山下久夫 ……249, 271, 373
山田孝雄 ……169
山田英雄 ……45, 64, 289, 290
山田雄司 ……318
山口敦史 ……368
山口佳紀 ……165, 167, 170
山中　裕 ……235
山本信吉 ……114, 116, 171, 235, 332, 342, 368, 369
山本ひろ子 ……294
横井裕人 ……249
横田健一 ……65, 114-117, 390
義江彰夫 ……115
義江明子 ……65, 82, 83, 91, 114, 135, 167, 378, 388
吉岡眞之 ……42, 118, 236, 261, 268, 368
吉川幸次郎 ……372
吉川　聡 ……318
吉川敏子 ……86, 195, 197, 198, 214, 217, 231, 232, 237, 245, 248
吉川真司 ……42, 44, 117, 270, 317, 318
吉田一彦 ……114, 191, 369
吉田恵二 ……165
吉田光男 ……190
吉田靖男 ……208, 216, 218
吉野秋二 ……45
吉村茂樹 ……171
吉村武彦 ……45, 87, 118, 168, 379, 389
米田雄介 ……332, 342, 347

ワ行

若月義小 ……46, 86
和田明美 ……62, 173
和田　萃 ……43, 44, 46, 48, 62, 63, 82, 117, 163, 237, 379, 389
和田英松 ……370
渡辺晃宏 ……314
渡辺　滋 ……84, 237
渡邉　卓 ……372
渡里恒信 ……165

外国人研究者

金　基與 ……190
李　基白 ……190
李　丙燾 ……190
金　思燁 ……191
金　秉駿 ……84
高　寛敏 ……164, 293
池　明観 ……190
鄭　早苗 ……190
盧　重国 ……190
韓　永禹 ……190
王　　勇 ……371
アール ……387
エンゲルス ……377, 388
W・J・オング ……371